地域を変えるチカラに

地域おこし協力隊 活動報告

田中　綾音さん

今年も岸良の正月行事「テコテンドン」に参加しました。いつものメンバーに加え今回は、岸良出身の方が連れてきた登山仲間さん、大学の教授と学生さん、テレビの取材クルーが参加して合計約 20 名に。北岳山頂で山の神様をお迎えし、焚火で餅を焼いて昼食をとり、強風に細心の注意を払いつつ大岩から岸良を一望し、平田神社へ戻って一年の地域安泰と五穀豊穣を祈願しました。

緑のふるさと協力隊を含めると岸良に暮らして 4 年が経ちますが、毎年恒例の地域の行事も、毎日見える海や山や草花も、初めてこの町に来た時と変わらず「いいな、きれいだな」と思います。

肝付町での日々はとても濃密で、様々な人がたくさんのチャンスやアドバイス、エールをくださり、私自身を育ててくださいました。地域おこし協力隊の任期は今月で満了ですが、４月以降も岸良暮らしを続けます。私が好きになったこの町の雰囲気がこれからも続き、上向いていくように、地域のことや町の観光のことに微力ながら取り組んでいきたいと思います。

４年間、ありがとうございました。これからも、どうぞよろしくお願いいたします。

吉田　有志さん

遅い正月休みを取り、カメルーン南部を旅した。

赤道に近い Ambam という小さな町を選んだ。水道の水が出なかったり、頻繁に停電が起こる激安宿に泊まった。マラリアになるのを恐れたので、日中の気温は 30 度を超え湿気もあるが長袖長ズボンだ。水道の水が出ないときは、大きな川に行き裸になって石鹸で体を洗った。

ある中年の女は大粒の汗を流し、40 円の朝食を小さな屋台で必死に売る。さっき買ったばかりのビニール袋に入った 10 円の水を微笑みながら僕に差し出した。―お金は要求しない―。

山奥や平地を一時間くらい歩いたところにひっそり住んでいるピグミー族という民族に会いに行った。電気も水道も通っていない。本当になんにもないところに、ポツンと土壁や木で出来た質素な小屋みたいな民家がある。

『俺たちは自らの意思でここで生活することをえらんだ。』ピグミーの男は言った。

生い茂る熱帯雨林の中に何か大切なものがあるんじゃないかと探した。

岸良に戻った。そして今もずっとそれを探している。

そうやって生活だったり協力隊の活動をしたい。

それは、僕も自らの意思でここで生活することを選んだひとりだから。